

18 特定地点における野鼠発生予察

1 試験担当者

北海道支庁野鼠研究室：上田明一、前田 誠

2 試験目的

北海道において野鼠被害防除のため、多くの造林地で生息数調査が行なわれているが、この調査はその時点の生息数のみが明らかにされ、爾後の生息数の増減を予測できないこと、さらに現在の方針区調査法より簡便な網状調査法の究明が要望されている。従って道内の特定地域での発生量予測に関する調査および簡易なる生息数調査法を検討するものである。

3 昭和42年度の経過とえられた結果

42年春の野鼠生息数は全道的にみて少なかったが、春の繁殖活動の開始は、例年より早いことが、性的成熟状態から認められた。

夏にいたって、野鼠特にエゾヤチネズミ個体群の生息状態は、道北から中央高地さらに道東地域にかけ、高密度のカ所が局部的にみられるようになったが、道南から石狩低地帯にかけては、全域的に生息数は少なかった。

この地域的生息状態の差違は、特定地点における調査より、次のことが考えられる。すなわち、生息数の少ない道南から石狩低地帯にかけては、室蘭、森宮林署管内に属する噴火湾地帯を除き、幼獣個体の出現が少ないこと、また妊娠個体がほとんど認められなかったことからして、春から夏にかけての繁殖活動が低調であったことによる。

これに対し、高密度の発生カ所が、多く認められた道北、中央高地、道東地域では、幼獣または亜成獣個体の出現率が高く、また妊娠率が高いことが、特定地点の調査から認められ、春から夏にかけての繁殖活動が活潑であり、しかも夏の時点でも、その活動が引続いて行われている状況にあった。

これらの道内の特定地点での繁殖活動と、市、道、国有林で実施されている、野鼠生息数調査資料から、42年の北海道の野鼠発生は、各地方とも秋繁殖活動により、個体数はさらに増加するが局部的であり、昭和44年のような全道的大発生の恐れは考えられない。しかし道北中央高地、道東地帯の一部では、今後の発生状況には警戒を要すると、8月24日の道内生物被害防除対策協議会で予報を発表した。

引続き行なった秋の調査結果で、局部的に高密度の発生を予測した、道北、中央高地、道東地帯では、ha 当り100匹以上の生息密度が現われるカ所も認められたが、全域的にみた場

合、大発生という状態ではなかった。また道南から石狩低地帯にかけても、生息数の増加は少なく、大体において予報どおりの発生状態を示していた。

なお秋の調査で、道中央高地の繁殖活動は9月中旬で、すでに休止期を示していたが同一地域内にありながら低地に位置する上川では、9月下旬に秋繁殖が行われていること、また道北地帯より石狩低地帯に属する地域のほうが、秋繁殖活動は活潑であったことが認められた。

これらの繁殖活動の相違が、如何なる要因によるかは、まだ明らかにすることはできないが、気温その他の気象条件がある程度、影響していることが考えられる。

なお特定地点で調査したエゾヤチネズミ個体群の生理的機能の相違を究明するため、採集個体の胃内容物の栄養分析を行なった。

以上の全道的な野鼠発生予察のための、特定地点による調査のほか、エゾヤチネズミ個体群の発生量を予測する目的のため、野幌国有林において、林床植物の異なる造林地と天然林の2調査地で、記号放逐法により、野鼠個体群の生長、発育状態、出生率、自然寿命、食草および種実の現存量、營養素の季節的变化、他生物との関係、気象要素などの総合的観点から、生物群集的研究を実施した。

4 昭和43年度の試験計画

- (1) 42年度に引継ぎ、特定地点での野鼠発生成長調査を、年令構成、繁殖状態から検討する。
- (2) 野鼠個体群の発生量を予測する試験を継続実施する。
- (3) 生息数調査の簡便化に関する試験を実施する。